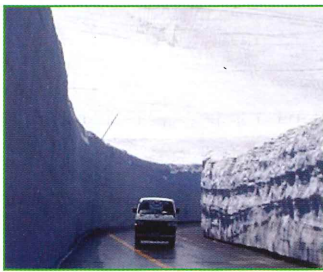


チューリップ 四季だより



「越中チューリップ紀行」
(裏表紙参照)



植物のフロリッジに注目

英国園芸研究家 吉谷 桂子

「花は最後のアクセントだよ。庭の植栽でもっとも大切なのは、フロリッジをいかに上手く構成するかにある」と、ある時、英国のガーデンに庭づくりのコツを聞いたことから、私の植物に対する見方が変わりました。

フロリッジとは、植物の葉群のことです。

「イングリッシュ・ガーデン」といえば、花の溢れるカラフルな庭を

イメージする方が少なくないと思いますが、実はその華やかさ、花の美しさだけで構成されているのではなかったのです。

私自身、英国で庭づくりをしていた頃、初めのうちは花の華やかさに気をとられ、フロリッジの存在には気付きませんでした。ともかくにも花咲く植物のコレクションに夢中で、自分の庭の景色がなかなかまとまらず悩んでいたのです。



▲葉の美しさが際立つカンナ。それを支えるように咲き乱れる小花の花壇。

そこで前述の意見は、まさに、目からウロコのアドバイスでした。

庭の骨格や背景を構成するため、花をたくさん選択をするより、まずフロリッジこそが、最初に検討されるべきキャラクターだとわかってからは、むしろ葉の美しい植物に興味が増えました。庭のなかで、フロリッジが春夏秋冬にわたり、効果的に庭の空間を埋めてくれること。うまくフロリッジを利用し、フロリッジを背景に花が咲くと、花が非常に映えることもわかりました。また、ひとことにフロリッジ、葉っぱといっても、園芸品種が多彩な現在、さまざまな色、形、質感のフロリッジがあります。実は、葉の美



▲前年の11月頃に植えて作ったピオラとギボウシの寄せ植え。4月の様子。

しさは、花以上に豊富なのかもしれません。

たとえば、シダレモミジのように細かい葉の集合でフワフワとした固まりのフロリッジ。アオキのように堅くてツヤがあり、彫刻的な存在感のあるフロリッジ。コニファーのようにまとまりのよいフロリッジは、庭を自然に片付いた印象に仕上げてくれます。逆に、ネグンドカエデのように成長の早い斑入りのフロリッジは、すぐに枝が伸びてきて目立つだけに、庭が散らかって見えるので注意が必要です。

花との組み合わせも楽しいものです。ツゲの生け垣のようにダークな色彩のフロリッジは、手前に明るい

色の花を植え込むと映えます。白い斑入りで明るい色のフロリッジには強い色彩の真つ赤や濃いピンクの花が映えます。直線的なスキのようなフロリッジには丸い葉や花の植物が似合うことなど、組み合わせを考えただけで、あらゆるイメージが湧いてきます。

さらに、花の命は短いけれど、葉っぱの見頃はぐっと長いものです。

春から秋、植物によっては、新芽から紅葉まで四季それぞれに美しい表情を見せてくれる品種も少なくありません。また、葉っぱ中心の植物は病害虫に強い種類も少なくないので、あまり農薬の御世話にならなくとも、庭づくりが楽しめます。

こうしたことをふまえて、庭に植える植物を選ぶときは、四季の移り変わりの中で少しでも長く園芸家の目を楽しませてくれる植物を選ぶことも、ローメンテナンスでありながら、ハイクオリティなガーデニングへの近道となるのではないのでしょうか。

球根植物も例外ではありません。

チューリップは、秋に球根を植えてから花の開花を待つ期間が長いわりに、気温が高くなってから花が開花する品種などはあつけないほどに花が早く散ってしまいます。しかし、チューリップの葉は実に美しいものです。ビロードのように高貴な手触り、彫刻的でシャープな造形。パン



▲英国チェルシーフラワーショウのモデルガーデン。ギボウシやモミジなどの葉群の美しい植物が配置されている。



▲チューリップの花が咲く前のピオラの寄せ植え。これからが楽しみなところ。

ジーなどと寄せ植えすると、モコモコとしたパンジーの花のなかでスツと立ち上がるチューリップの葉のなんと美しいことか。他の球根植物も多くの品種がきれいなラインを描く葉が多いので、同様のことがいえます。

植物のもつ多様なエレメントに注目して、それを組み合わせること

とで、ガーデニング、あるいは、コンテナ・

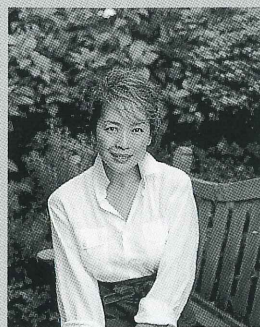
ガーデニングは、まだ

まだ幅広い楽しみ方が

あるように思えます。

【略歴】

よしや けいこ



東京生まれ。英国園芸研究家、ガーデン&プロダクト・デザイナー。約七年間に渡る英国の暮らしを生かしたガーデンライフの楽しみを提案。英国を中心にヨーロッパ二百力以上の庭を訪ね、NHKBS2、NHK教育テレビなどガーデニング番組の企画とキャスターをつとめる。著書に「吉谷桂子のガーデンライフ」(学研刊)、「吉谷桂子の庭からの贈り物」(NHK出版刊)など



新しい球根生産地

—ニュージーランド

チューリップ四季だよりVol. 22で、一九九九年にニュージーランド産のオリエンタル系ユリの球根が隔離検疫免除となり、日本への球根の輸出货量が増加傾向にあることをご紹介しました。

現在、ニュージーランドではオランダの球根輸出会社主導のもとで、北半球との季節の違いを利用した、質の良い北半球向けのチューリップ球根の生産がすすめられています。富山県花卉球根農業協同組合発行の「球根だより」十一、十二月号の報告を元に現在のニュージーランドの状況についてご紹介します。

ニュージーランドの

国土と気候

ニュージーランドは、オーストラリア大陸の東側にあり、北島と南島の二島からなる南極大陸に最も近い国です。

この国の面積は二十七万五千三百四平方キロメートルで、日本の面積の約四分の三です。人口は四百万九千百人で、日本の約三%にすぎません。

主要産業は畜産を中心とする生産

性の高い農業で、輸出品の約三割を酪農品や食肉で占めています。

北島は亜熱帯性の気候帯に、南島は温帯に属しており、チューリップの球根生産地は、南島の南端にほぼ集まっています。しかし、その技術はまだ確立されるまでに至っていません。

オランダの球根会社は、これまでに南アフリカ共和国をはじめとするアフリカの国々や、ブラジル、チリなどの南アメリカ大陸の国々で球根生産を試みており、主に北半球のカナダやアメリカ、ヨーロッパの国々への輸出を目的としています。



▲チューリップ畑の隣に牧草地が広がる

ニュージーランドでの

球根生産の利点

①夏と冬が逆

ニュージーランドは南半球に位置し、日本などの北半球の国々とは季節が逆になります。ですから、日本が冬となる一、二月はニュージーランドでは夏にあたり、球根の掘り取り時期となります。

北半球で十月や十一月にチューリップの切り花を生産する場合、北半球の国々で生産された球根を使用するとほぼ一年間球根を冷凍貯蔵しなければなりません。冷凍期間が長くなれば長くなるほど切り花の品質は劣っていきます。

しかし、南半球の国々で生産した球根を利用して切り花生産を行えばその冷凍の期間が短く、または球根収穫後冷蔵処理を行い、すぐに栽培利用できます。これにより、北半球の国々で生産された球根では不可能であった品質の良い切り花の生産が可能となります。また長期間にわたる球根の冷凍貯蔵が不要となることから、切り花生産にかかる費用を下げる事ができるのです。南半球の国々で球根や球根切り花の需要が少ない現在、この地域の球根生産のターゲットは日本をはじめとする北半球に位置する国々です。

現在、日本において十月から十二月にかけて切り花生産されているチ

ューリップは、その年掘り上げられた球根を低温処理した超促成用の球根か、または前年からアイスチューリップと呼ばれる抑制栽培された箱植えチューリップをオランダから輸入したものが利用されています。

しかし、それらの処理は品種の特性によつて適応できる品種が限られてしまうほか、切り花一本あたりの経費が高いなどの問題点があります。これに対し、ニュージーランド産の球根を利用すれば、通常の促成栽培と同じ条件で栽培することができ、鉢花が十月から十二月に生産可能となるのです。

②温暖な気候

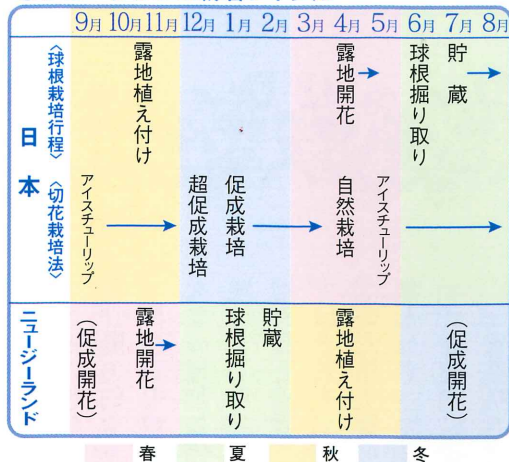
ニュージーランドは酷暑・厳寒のない国で、球根の生育や保管に適しています。夏の球根の劣化や掘り取り後の腐敗、冬の湿害もなく、球根の肥大時期の日照量も多いようです。

③土地と労働者の確保

牧草地がほとんどのため、大面積の新しい土地が容易に確保できます。広いところでは三十ヘクタールを一区画にして栽培している圃場もあります。また、一ヘクタール当たり千七百ニュージーランドドル(約十二万円)で借りることができるそうです。

また、ニュージーランドでは、酪農に関わる仕事以外は少なく、若い労働者の確保も容易にできます。あ

●チューリップの栽培サイクル



るチューリップ球根の生産者は、新しい雇用を生み出す産業を行う者として新聞でもとりあげられていたことです。

ニュージーランドにおける球根生産の問題点

①水の確保

温暖な気候で小雨であることがメリットであると同時にデメリットにもなっています。

降水量が少ないため、牧草地にも散水が行われていることですが、チューリップも必要な時期に十分な水を確保することが大変重要です。

しかし、政府が管理している給水口も少なく、一区画が二十〜三十ヘクタールの圃場では、スプリンクラーでの灌水だけで数日かかります。これでは、適期に十分な灌水が行えず、生育に悪影響を及ぼすことにな



▲スプリンクラーが設置された畑

りかねません。

実際に、今期はチューリップの開花前後の最も水を欲しがる時期に雨が少なかったため、充分に草丈が伸びず、茎が短いまま花が咲いていました。

②生産者が少ない

この地域の球根生産は六人の生産者（団体）が行っています。各々の栽培地も三十〜四十キロメートル離れており、天候も若干差があります。オランダや日本の場合、近くに多くの生産者がいるため、お互いの意見交換が容易に出来ますが、ニュージーランドでは困難です。また、どこも大規模栽培が行われているため、機械が壊れた場合の貸し借りもほぼ不可能で、機械の専門業者もいません。

③品種の特性の利用が困難

また、北半球での促成栽培用という限定された球根が生産されているため、品種もおのずと限られたものになります。そのため、開花期や掘り取り時期といった生育時期のずれを利用した計画的な経営を行うことが困難です。その結果、適切な管理が行えず、品質の低下が懸念されます。

そして、ニュージーランドで栽培されている球根の種球の大部分はオランダから、また、その一部は日本（新潟）から輸出されています。季節が逆の北半球から種球根が送られてきますので、球根は生理的にパニックになります。

ニュージーランドの気候に慣れるまで、三作は必要であるという生産者もいます。それだけ時間がかかるため、北半球の国々に輸出するのに年月がかかりすぎることが問題となります。

日本へ輸出するために

課題

ニュージーランド産の球根を利用したチューリップ切り花の品質は、オランダで箱植えし、日本で育てたアイスチューリップのものよりは良く、その年に掘り上げられた球根を使つて超促成栽培された切り花よりは劣るようです。技術的に、適切な栽培管理法が確立されていないため



▲広大なチューリップ畑

か、まだまだ安心して手に入れることの出来る商品ではないようです。しかし、技術が確立し、日本の高冷地での栽培や水耕栽培が容易になれば様々な可能性が出てきます。

ニュージーランド産の球根を利用するメリットは九月から十二月にかけての切り花・鉢物生産においてオランダ産球根を利用した場合より高品質のものが生産できるという点です。季節の変化に富んだ日本において、春を感じさせる花であるチューリップが、この時期の日本の市場にどれだけの需要を見出せるかということが一番重要な問題であると考えられます。

これらの需要と夏場の栽培管理にかかる経費とのバランスを考慮することが今後の課題となります。

『チューリップ・インスピレーションの泉の四〇〇年』

〈パートⅦ〉

De tulip (オランダ・リッセ市チューリップ博物館発行) より

第八期一九五〇年～一九九四年

ヨーロッパにおける戦争が全て終結し、猛スピードで復興がはじまりました。商業は厳しく規制され、個人が生産物を自由に流通させることは出来なくなりました。評価・割り当・認可・栽培権・輸入課税等、複雑な条件が課せられました。球根産業においても同様に自由が制限されましたが、それほど危機的な状況には至りませんでした。他の花々についても規制がすすみ輸出が制限されるようになると、国外での「花取引」の保護が始まりました。それによって、その市場は球根関係者にとって再び魅力的なものとなりました。

再び繁栄が訪れ、チューリップの需要の増加に伴い栽培面積も増加し続けました。それまでは砂地での栽培がほとんどでしたが、北オランダではそれまで適地ではないと思われていた粘土質の土壌で、土壌の熱を蓄えやすい性質を利用したチューリップ栽培が成功したのでした。

一重早咲きとダーウィンチューリ

ップとの交配により、二十年がかりで生み出された新しい系統のトライアンフチューリップが台頭しはじめます。促成栽培する場合は、それほど早い時期からの開花は望めませんが成育は良好で、すぐれた球根生産者も育ちました。六〇年代の初めには、栽培面積三十平方メートル前後からのスタートでした。

戦後すぐの頃にはすでに、ダーウィン・ハイブリッドの栽培面積は全体の一割に達していました。この新系統は、一重早咲きや八重咲き、ダーウィン、メンデルに比べて、生産性が著しく良かつたことを示しています。そして球根産業がますます発展し、さらに多くの従事者が利益をあげるよ



▲「ブラック パーロット」(パーロット咲き)
1937年オランダにて作出。

うになると、人件費も値上がりしていきます。非常に労働が集約型である球根生産にとって、「機械化」は人件費を抑える上で重要でした。こうして、六〇年代には、球根産業が根本的に変化しはじめます。しかし、その変化に伴い、その後の新品種を得るために品種改良の研究という困難な業務が必要不可欠となります。これは、大勢の人手が必要となる仕事で、十五年後によろしく利益が出てくるという、あたかも水が湧き出るのを待つかのような不確かなものでした。

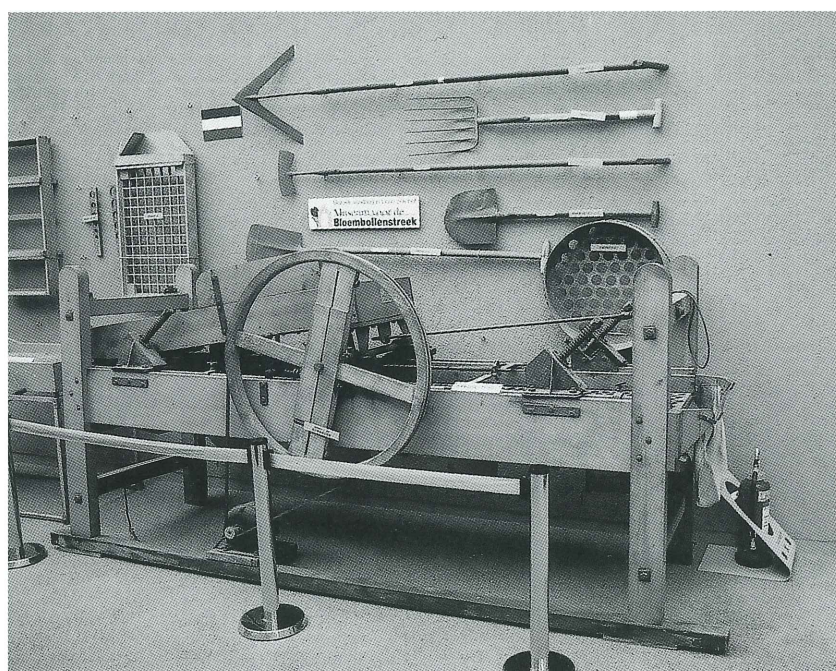




最も望まれるのは、新品種が市場に出まわる一年か二年前に、品種改良によって、同等もしくはより良い品種を世に出すことでした。

その後、品種改良の研究が一時ストップします。

しかし、時代が変化するにつれ、この分野の需要が再び落ち込み、さらに優れた商品が求められるようになります。在庫の品薄状態が進み、危機的な状態に陥ります。



▲オランダのチューリップ栽培に使用された農具
(チューリップ四季彩館所蔵)

その間にトライアンフやダーウィン・ハイブリッドが作出され、全生産量の三分の二がその二系統で占めるという状況から始まったことも理解できる話です。

このような状況下において、良い展開もあり、一九六〇年頃には有効なヨーロッパ経済連合(E・E・G)が設立され、「関税」の見直しから始められました。球根は大部分が国外非課税となり、切り花も対象とな

りました。そしてこのことが、危機的状況から脱出するきっかけとなったのでした。

オランダの花き産業は、それまでに類をみない程活性化し始めました。

オランダにおいて、密接に結びついた実質的な園芸学教育・研究・指導の成果により、結果と

してもたらされた急激な生産増加と花の需要のバランスが不安定であっても、オランダ人開拓者たちは恐れはしませんでした。

チューリップにも全く同様な活性化がみられました。後はむしろ、オランダの切り花が海外市場で手荒な扱いを受け続け、品質が心配されるという問題に行き着きました。特に、ライン川沿いの国の業者は、直接オランダからヨーロッパの市場に向けて数時間かけて小さなトラックで行商しました。彼らは、トラック側面のシャッターを開けて、オランダからの新鮮なチューリップをそのまま販売したのでした。(歌にあるような「アムステルダムから来た、美しい・チューリップ」とは全くかけ離れたものでした。)

その後まもなく、チューリップ販売で百年以上の長期にわたり得意先であったヨーロッパ近郊の市場がチューリップの販売から手を引いたため、ヨーロッパ経済連合が介入することになりました。(次号へつづく)



チューリップ四季彩館
からのお知らせ

☆第18回春を呼ぶチューリップ展

『越中チューリップ紀行』

—春の散歩道—

雪の大谷や合掌造りなど富山の春の風景を、一足早く
2万本のチューリップが彩ります。

と き：平成16年2月27日(金)～3月7日(日)

ところ：チューリップ四季彩館ホール



▲第17回春を呼ぶチューリップ展より

催し物ご案内

常設展

『季節のフラワーガーデン
—プリムラの庭—』

1Fチューリップテラス

平成16年2月20日(金)～4月13日(火)

季節のフラワーガーデン第8弾。

春を呼ぶ花として世界中で愛されている「プリムラ」
を用いた早春の庭をお楽しみ下さい。

小企画展

『花の折り紙展』

2Fセミナールーム

平成16年2月27日(金)～3月7日(日)

和紙の折り紙で作られた繊細な春の花を中心に、
約40点を展示します。(展示協力/林久夫氏)



チューリップ四季彩館
TONAMI TULIP GALLERY

2004年2月発行

(財)砺波市花と緑の財団 〒939-1381 富山県砺波市中村100番地の1

TEL 0763-33-7716・FAX 0763-33-0090

URL <http://www.tulipfair.or.jp/>